

担当者：堀 潤之

フランスにおける日本映画受容——溝口健二と小津安二郎

この授業の目的は、フランス、さらには欧米における日本映画研究の言説を、日本映画と「日本的なもの」という概念との緊張関係において大雑把にたどることである。西洋は1951年のヴェネツィア映画祭で、日本映画を「発見」した。その際、日本映画における「日本的なもの」がどのように評価されたのかを、『カイエ・デュ・シネマ』誌による溝口健二の『雨月物語』評などを参照しながら考察する。次に、溝口よりやや遅れて西洋に紹介された小津安二郎の受容について、特に『晩春』を題材に、ドナルド・リチャー、ポール・シュレイダー、デヴィッド・ボードウェルらの言説をたどっていく。最終的には、映画研究という領域において、「日本学」という枠組みが果たして有効たりうるのかどうかを検討してみたい。